

帰宅願望を訴える方への取り組み

～Listen to your voice～

施設名：介護老人保健施設 はまゆう通所

発表者：田港 和美

阿嘉 浩子

【はじめに】

デイケアを利用されている利用者は色々な目的、理由がある。リハビリや活動を目的として利用されている方が多い中で、リハビリ以外に空き時間に対し不満や不安につながる事も少なく無い。今回、利用開始時からリハビリや活動以外の時間が長く感じると、強い帰宅願望を訴えていた利用者に対し支援を行った結果、変化を認めたので報告する。

【事例概要】

T様 73歳 男性 週3回利用
既往歴：アテローム血栓性脳梗塞 高血圧
糖尿病 右半身麻痺（軽度） 右空間無視
失語症 高次脳機能障害
利用目的：言語リハビリ及び活動
言語面：理解は単語レベル、文レベルになると曖昧である。表出は単語レベル可能だが、ほぼ自発話無し。他者とのコミュニケーションは乏しい。
移動：歩行は自立だが右空間無視があり側近見守りにて注意が必要である。
病前：会社を経営しており、毎日忙しく過ごされていた方。

【問題点】

リハビリや活動が終わると表情がこぼれ、落ち着きなく鞆を持ち、立ち上がり「帰宅願望」訴える様になった。その為、STへ帰宅したいという訴えについて相談する。リハビリ以外の時間「何をしたいか分からない」「リハビリ以外の時間が長い」から帰りたいという事が明らかとなった。更にSTより失語症の為、訴えを言語化できない事による不安が大きいとアドバイスがあったので職員で話し合い下記の支援を行った。

【支援】

①環境に慣れる様、本人に分かり易いよう単語で多くの声掛けを行なった。

②「何をしたいか分からない」事について時間を紙に書き「可視化」を行った。

③リハビリ以外の時間は、様々な難易度のパズル

に挑戦してもらった。

【結果及び考察】

①緊張していた表情が軟らかくなり笑顔が見られる様になった。

②時間を可視化する事で、次の活動の確認が出来、不安を解消出来た。

③リハビリや活動以外の時間を、対象利用者のニーズに合わせたサービスの提供が行なえた事で満足度を高め、帰宅願望が無くなった。

複数の支援によって休みの日もデイケアに行きたいと言うように変化が認められた。満足度に関する質的研究において、人では「個別的、共感的な態度」「他利用者との交流や会話」が要因としてあげられている。T様の思いに共感しコミュニケーションが図れた事もデイへ通う事に関して変化したと考えられる。

【まとめ】

今回の取り組みを通して、一人一人のニーズの分析とそれに見合った個別的で、きめ細やかな支援展開が必要と再認識した。今後も、他職種と連携を図り個々に合わせた質の高いサービス提供を行っていく。